

ユダヤ教文書「ダブルー・エメト」作成の 背景と発表の経緯

——マイケル・A・サイナーの働きに着目して

木 鎌 耕 一 郎

はじめに

20 世紀後半からユダヤ教とキリスト教の宗教間対話は様々な場面で展開を見せている。カトリック教会においても第二バチカン公会議以降、教皇庁に「ユダヤ人との宗教的関係委員会」が設置され、諸々の文書の作成や対話の働きかけが組織的に行われ、教皇自身によるアウシュヴィッツ訪問、初のシナゴーク訪問、聖地訪問などを通して過去の悔い改めやユダヤ教徒との関係改善への試みが意識的に取り組まれてきた¹。しかし、両宗教間の対話の取り組みはキリスト教側からの発信や働きかけによる場合が多く、それに対するユダヤ教からの反応は常に歓迎ばかりとは言えず、むしろ常に何らかの不協和音が聞こえてきたことも事実である。このことは、両宗教間の対話が、一筋縄にはいかない困難な課題を抱えていることを物語っている。

そのような中で、2000 年に発表された「ダブルー・エメト キリスト教徒とキリスト教に関するユダヤ教の声明」(*Dabru Emet: A Jewish Statement on Christians and Christianity*) という文書は、ユダヤ教内に議論を呼び起こした挑戦的な試みであり、両宗教間により踏み込んだ対

話を促す契機になった。*Dabru Emet* というタイトルは「真実を話す」というヘブライ語から名づけられている。この文書はユダヤ教を代表する主要な団体から発せられたものではなく、キリスト教との対話に積極的なアメリカのラビやユダヤ教学者らによって起草されたもので、発表媒介が新聞紙上 (*The New York Times*, *Baltimore Sun*) やインターネット上であった点もユニークである。2000 年の発表時点で同文書に賛同した 220 人以上のラビやユダヤ人学者の署名が集まった。その内容は、現代におけるキリスト教のユダヤ教に対する姿勢の変革を評価した上で、両宗教間の関係について議論を促す 8 つの項目をコンパクトにまとめている。キリスト教側の変革に対する、ユダヤ教側からのいわば「草の根的な応答の試み」と見ることができるだろう。

この文書の起草者は四人おり、そのうちの一人で企画から発表に至るまでの立役者となった人物は、ラビのマイケル・A・サイナー (Michael A. Signer, 1945-2009) という人物である。本稿では、彼がどのような人物で、起草の背景にはどのようなことがあったのか、また、どのような読者を想定して何を目的にこの文書の作成に取り組んだのかを、サイナーの論考を中心に考察を交えながら探ってみたい。また、資料として同文書を私訳によって紹介する。

¹ 拙稿「*Nostra Aetate* 公布 50 年を経たカトリックとユダヤ教の対話 — 1998 年教皇庁文書「私たちは忘れない」の反響を中心に」『日本カトリック神学会誌』第 27 号 (197-225 頁) 2016 年を参照。

1. マイケル・A・サイナー

1945年3月29日にロサンゼルスで生まれたマイケル・A・サイナーは、1966年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校を卒業、1970年にヘブライ・ユニオン・カレッジ（HUC）においてユダヤ教史とラビ文学の研究で修士号を取得、同年にラビの資格を得た。1974年からロサンゼルスにあるHUCのユダヤ宗教研究所（Jewish Institute of Religion）で1991年までユダヤ教史の教授を務めた。その間、トロント大学の博士課程で中世研究に携わり、12世紀の聖書学者サン・ヴィクトル派のアンデラスに関する論文で、1978年に博士号を取得した。中世のパリのサン・ヴィクトル派の学校では、修道会に属する学者たちがユダヤ人を招いて聖書の釈義を学修していたことが知られている。サイナーは、中世のキリスト教徒とユダヤ教徒の間に見られる否定的な相互作用を検証するとともに、両者の間に肯定的な協働関係が存在したことを見だし、その両方の側面を知る必要があると考えようになった。

トロント大学在学中に、サイナーはユダヤ教とキリスト教の宗教間対話の実践に関わりはじめた。ロサンゼルスでは、カトリック司祭とラビとの対話に携わり、カトリックのロサンゼルス大司教区の聖ヨハネ大神学校（St. John's Major Seminary）とHUCの学術交流事業の創始メンバーとなり、同大神学校で聖書講座を受け持った。また、ユダヤ教徒、カトリック、プロテスタントの同僚のために黙想会を運営したという。

1992年からノートルダム大学の教授陣に加わったサイナーは、同大学の中世研究所の上席研究員、ヨーロッパ研究ナノヴィク・センター教授、社会問題センター教授を務め、学生にショーア研究のための教育的な機会を提供するノートルダム・ホロコースト・プロジェクト（Notre Dame Holocaust Project）を立ち上げ、その指導にあたった。サイナーの学識は、中世ラテン

語の聖書注解から近代思想、ユダヤ教とキリスト教の関係史に至るまで幅広く、多くの論文と書籍が著された²。アメリカ国内に留まらず、ドイツのベルリンにあるフンボルト大学、アウグスブルク大学のカトリック神学部でも講座を持ち、ポーランドではクラクフにある教皇庁立神学大学の他、ワルシャワ、ルブリン、プロツワフなどのカトリック大学で教育に携わるなど、主にカトリック系の学術機関を舞台に国際的に活躍した。2005年には、ポーランドのユダヤ教・キリスト教協議会から「和解の人」に選出された³。

2009年1月10日土曜日、サイナーは膀胱癌のため、妻と二人の娘を遺して63歳で亡くなった。ノートルダム大学神学部長のジョン・カヴァディニは、サイナーの働きを高く評価し、「彼を失うことは、神学部の同僚たちと学生たちだけでなく、世界中の神学にとっても痛手である」と追悼している⁴。

² 単著に、*The Way into the Relationship Between Jews And Non-Jews: Searching for Boundaries And Bridges* (2008)、共著に、*Spinoza's Earliest Publication?: The Hebrew Translation of Margaret Fell's a Loving Salutation to the Seed of Abraham Among the Jews, Wherever They (1987)*, *Two Faiths, One Covenant?: Jewish And Christian Identity In The Presence Of The Other* (2004)、編集に携わった書物に、*Humanity at the Limit: The Impact of the Holocaust Experience on Jews and Christians* (2000), *Memory and History in Judaism and Christianity* (2001), *Jews and Christians in Twelfth-Century Europe* (2001), *Coming Together for the Sake of God: Contributions to Jewish-Christian Dialogue from Post-Holocaust Germany* (2007), *The Exorbitant: Emmanuel Levinas Between Jews and Christians* (2009) などがある。

³ キリスト教徒とユダヤ人の協働や対話を促進することを目的とする国際キリスト教・ユダヤ教協議会 ICCJ (International Council of Christians and Jews) の本部はドイツのヘッペンハイムにあり、傘下に32カ国の38団体が加盟している。ポーランドの支部では、両宗教間の対話に尽力した個人を年に一回「和解の人」に認定している。同協議会のウェブサイト (<http://www.jcrelations.net/Home.112.0.html?&L=3>) を参照。

⁴ 以上の記述は、サイナーの逝去を報じたノートルダム大学のウェブニュース Theologian Rabbi Michael Signer dies, by Michael O. Garvey, Jan 11,

2. 「ダブルー・エメト」作成の背景

(1) 二つの立場

「ダブルー・エメト」という文書が作成された背景について、国際ユダヤ教・キリスト教協議会 (ICJC) のウェブサイトマイケル・A・サイナーによる 2001 年 7 月のベルリンでの講演に基づく *Some Reflections on Dabru Emet* という論考が掲載されている⁵。この論考を読むと、サイナーが「ダブルー・エメト」の起草にあたり、思想的にも実務的にも重要な役割を果たしたことがうかがわれる。「ダブルー・エメト」発表の約 8 年前に、サイナーはユダヤ人のキリスト教研究者とともに「キリスト教を研究するユダヤ人学者の会」(The Jewish scholars Group on Christianity) を立ち上げた。この会は、ボルチモアにある宗教間対話組織「キリスト教・ユダヤ教研究所」(The Institute for Christian and Jewish Studies)⁶ の後援を受けていた。サイナーによれば、この会には大きく二つの立場の人々が存在したという。ひとつはキリスト教との関わりを学術的な研究対象に限定し、自身のユダヤ教信仰とは無関係だとする立場である。このような研究者の傾向について、サイナーは次のように指摘している。

彼らの焦点は単に歴史的、科学的なものである。事実、彼らの多くは、研究のために利用

しているキリスト教の諸文献が、より広いキリスト教的伝統の中でいったいどれほどの影響力を持っているかを検証する幅広い理論的な枠組みを有していない。彼らは、現代のキリスト教、とりわけキリスト教徒のユダヤ教に対する態度を、過去の連続体として理解している。彼らはノストラ・エターテやドイツのルーテル教会によるラインラント教会会議のような諸文書が存在することは認めても、キリスト教徒のユダヤ教に対する積極的な態度は、キリスト教徒の学者たちの小さなエリート集団内に限られたものであると考えている。そのため、こうした学者たちの大部分は、現代のキリスト教が、現代のユダヤ教共同体の健全な状態や存続に対する挑戦や脅威と考えている⁷。

もうひとつの立場はサイナーを含む少数派で、研究と個人のユダヤ教信仰を有機的に結び付け、現在のキリスト教徒に見られるユダヤ教徒に対する姿勢の変化を実存的に受け止める人々である。この立場については次のように説明される。

ユダヤ教徒にとって、キリスト教をキリスト者と同じように理解することは、ユダヤ教への信心にゆえに困難であるにしても、まさにその同じユダヤ教徒が、キリスト者が為していることと同じではないにしても、キリスト教に関する見方を広げている。その上、私たちは、単に一連の文献としてのキリスト教ではなく、現代のキリスト教共同体を目の当たりにしている。そのキリスト教共同体は、私たちが改宗させようと脅かすことはない。むしろ、彼らは首尾一貫して、ユダヤ人である私たちと人類の未来の展望を分かち合えるように、自分たちの信仰者としての生き方を変革するための実践や教義を打ち出している。

2009 (<https://news.nd.edu/news/theologian-rabbi-michael-signer-dies/>), 情報サイトのナショナル・カトリック・リポーターに掲載された追悼文 Remembering Rabbi Michael Signer, by Richard McBrien, Feb 9, 2009 (<https://www.ncronline.org/blogs/essays-theology/remembering-rabbi-michael-signer>) 等を参照した。

⁵ ICJC のウェブサイト (<http://www.jcrelations.net/Some+Reflections+on+Dabru+Emet.2222.0.html?L=3>) には PDF のテキストが添付してある。以下の注で示す頁数は、この PDF テキストの頁である。

⁶ キリスト教とユダヤ教の宗教間対話に携わる非営利団体として 1987 年に設立され、現在はイスラム教との対話を含めた Institute for Islamic・Christian・Jewish Studies (ICJS) となっている。

⁷ *Some Reflections on Dabru Emet*, p. 4.

さらに、私たちは、第二次世界大戦後、新しい地平がキリスト教の様々な教派において開かれたことを認めている⁸。

第二の立場の学者たちは、戦後のキリスト教がユダヤ教に対する姿勢を大きく変革したことに対して積極的な評価をしている。その変革とは、カトリック教会に関して言えば、第二バチカン公会議の宣言でユダヤ教との「霊的なきずな」を強調した「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」(*Nostra Aetate*) 第四項⁹を契機に、その精神の具現化のために行われた諸々の企て、すなわち教皇のシナゴーグへの初訪問やバチカン市国とイスラエルとの国交正常化、ショアーの出来事に焦点をおきカトリック教会の歴史認識を示した教皇庁「ユダヤ人との宗教的関係委員会」の文書『私たちは忘れない—ショアーに関する反省』¹⁰の公布、2000年の大聖年に行われた教皇の聖地訪問などが挙げられよう。また第二の立場の学者たちは、現代のキリスト教神学者の中にリスクを負いつつもユダヤ教に対する教会の姿勢を再構築しようとする者たち、とりわけ「キリスト教・ユダヤ教関係に関するキリスト教学者の会」(Christian Scholars Group on Christian-Jewish Relations)¹¹のメンバーの活動を高く評

価している。

(2) キリスト教徒のテシュヴァ

「キリスト教を研究するユダヤ人学者の会」の中にあった二つの立場には、上記のような意見の不一致があり、そのことが会の存在意義に深刻な問題を生み出したという。そのような中で少数派だった第二の立場の学者たちは、長い議論を通して次の三点について強調してきたという。

①キリスト教は一枚岩ではない。キリスト教のあらゆる教派において、多様なユダヤ教へのアプローチが存在する。一部には、ユダヤ人の改宗を主張し、ユダヤ教信仰に関する中傷的な見解をもつキリスト教の諸グループがある。彼らはユダヤ民族に対する暴力を擁護することはないが、イエス・キリストが独占的な救済への道であるという信仰が、決して取り消されることのない神との契約を相続する者としてユダヤ民族と向き合うことを妨げている。

②ユダヤ人について、明確な「メタノイア (metanoia, 悔恨)」を示すキリスト教の教会の人々がいる。彼らはそのことを自分たちの子どもに教義を教える教科書の中で明示している。彼らは、自分たちの聖務日課を変更し、誤解の可能性のある祈祷書の箇所も書き直した。ユダヤ教の諸団体は、この新しい関係を支持する聖職者の多くに敬意を払ってはいるが、そうした声明の神学的重要性を認めるような類のユダヤ教の返答は何も存在しない。

③公の声明が多くのユダヤ教の諸組織によって発せられたとき、彼らがキリスト教徒の間

⁸ Ibid.

⁹ 全文は教皇庁ホームページの第二バチカン公会議文書集(DOCUMENTS OF THE SECOND VATICAN COUNCIL)の中に掲載されている(http://www.vatican.va/archive/hist_councils/ii_vatican_council/index.htm)。邦訳は第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』(カトリック中央協議会, 2013年)384-391頁を参照。

¹⁰ *We Remember: A Reflection on the SHOAH* (1998年3月18日発表)の全文は、教皇庁ホームページの「ユダヤ人との宗教的関係委員会(Commission of the Holy See for Religious Relations with the Jews)」に関する諸文書の一つとして掲載されている。邦訳は和田幹夫訳「わたしたちは記憶にとどめます—ショアーを反省して」『人間文化』第3巻(英知大学人文科学研究室, 2000年)161-175頁を参照。

¹¹ サイナーは具体的にプロテスタント神学者の

Paul van Buren, Alice and Roy Eckardt, カトリックでは司祭の Fr. John Pawlikowski や修道女 Sr. Mary Boys の名を挙げている。Some Reflections on Dabru Emet, p. 5.

に起こった重要な変革のニュアンスや知識を明確に欠いていることが、しばしば浮き彫りになった。こうした公の声明は、月並みな考え方を継続させ、ユダヤ教共同体内部に困惑をもたらした¹²。

①は、旧態依然とした排他主義的なキリスト教徒が今もなお「一部」には存在することを認めることによって、第一の立場の学者の見解に一定の理解を示している、と見ることができる。そして、この三つの強調点の中では、思想的な側面からは②が、実践的な側面からは③が、とりわけ重要と思われる。

まず、②については、「ダブル・エメト」発表直後のユダヤ教のヨム・キップル（贖罪の日）の祝日に、サイナーが行なった「キリスト教徒のテシュヴァについて」(*On Christian Teshuvah*)というタイトルの説教が参考になる¹³。「テシュヴァ」(*Teshuvah*)とはヘブライ語で「悔恨、悔い改め」を意味する言葉で、②で用いられているギリシア語の「メタノイア」と同義である。サイナーはこの説教で、ヨム・キップルが神への罪と人間同士の罪を悔い改めるための祝日である点を強調した上で、赦しを請う者を寛大に赦し、和解することを会衆に勧めている。さらに第二次大戦終結後、カトリック教会が上記のようなユダヤ教に対する新しい姿勢を示してきたことに一定の評価を与えている。とりわけ、教皇庁文書『私たちは忘れない—シヨアーに関する反省』の文中に「これは、テシュヴァの行為である」と記されている点を重視し、これをユダヤ教徒のヨム・キップルと重ね合わせ、キリスト教徒、とりわけカトリッ

ク教会からのアプローチを「受け入れる時が来たかもしれない」、「その選択は、我々の手中にある」と会衆に語りかけ、次のように述べている。

テシュヴァを為す人々〔キリスト教徒〕は、それらの行為〔過去の反ユダヤ的な行為〕を犯さなかったし、彼らの多くは、それらが二度と起こらないことを確実にしようと専念している。我々は、過去の罪への怒りを持ち続けることでユダヤ民族を保持することはないだろう。テシュヴァは、忘却を意味するのではなく、過去に行ったような行為を二度と繰り返さないための、記憶の儀式化である¹⁴。

サイナーが指摘する「記憶の儀式化」という表現を正しく理解するためには、紀元2000年を大聖年と定めたヨハネ・パウロ二世が、その準備段階となる1990年代から発表してきた一連の文書を一瞥する必要がある。同教皇は1994年に臨時枢機卿会議を招集し、そこでの議論が使徒的書簡『紀元二千年年の到来』(同年11月公布)¹⁵に反映された。この文書には大聖年に向けた教会のあるべき姿勢が、次のように記されている。

教会が、この千年間に教会の中で起きたことをはっきり意識して、この節目を通過することは適切なことです。教会は、過去の誤りと不信仰、一貫性のなさ、必要な行動を起こすときの緩慢などを悔い改めて自らを清めるよう、その子らに勧めることなくして、新しい千年紀の敷居をまたぐことはできません¹⁶。

¹² *Some Reflections on Dabru Emet*, pp. 5-6.

¹³ Michael A. Signer, "On Christian Teshuvah: The Open Heart of the Jewish People", fall, 2000. この説教は、ボストン・カレッジのCenter for Christian-Jewish Learningのウェブサイト(https://www.bc.edu/content/dam/files/research_sites/cjl/texts/cjrelations/resources/articles/signer.htm)に掲載されている。

¹⁴ Ibid.〔 〕内は訳者の補足。

¹⁵ 日本カトリック宣教研究所監修／カトリック新聞編集部訳『教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡 紀元2000年の到来』(カトリック中央協議会、1995年)。

¹⁶ 同上、44頁。

また1998年11月には大聖年の大勅書『受肉の秘儀』¹⁷が公布された。この文書は「記憶の浄化」の必要性が説き、キリスト教徒の過去の過ちを認め、教皇自身が神に許しを請う内容となっている。

さらに2000年に公布された教皇庁国際神学委員会文書『記憶と和解—教会と過去の種々の過失』¹⁸では、教皇が提示した「記憶の浄化」の意義を考察している。同文書は、善悪の道徳的な価値に関わる行為の責任である「客観的責任」は「歴史の中で継続する力」があり、「その悪は子孫の良心と記憶に重くのしかかる負担となって、なお生き続ける」と指摘している。つまり、現代のキリスト教徒が、過去のキリスト教徒の冒した道徳的な罪について責任と負担を負っているという意味である。このような過去から継承された負担は、「過去において悪を行った人々と、彼らの後継者である現在の人々との間に事実として存在する連帯性」によって、「共通の記憶」となる。この責任からの解放とは、時間を越えて過去の人々と連帯している現代の人々が神に赦しを請うことによる「記憶の浄化」であることが示される¹⁹。次のように記されている。

記憶を浄化するということは、個人としての、また集団としての良心から、過去の遺産として残った怨恨、あるいは暴力のすべての形式を、道徳の行動様式の刷新の基礎となる歴史と神学の新しい判断、厳密な判断に基づいて取り除くことを意味します²⁰。

大聖年に向けたカトリック教会のこれら一連の動向には、キリスト教徒が歴史的、神学的な判断に基づいて、過去と現在を結ぶ「連帯性」の原理によって、「テシュヴァ」によって過去から継承された負の遺産を取り除き（浄化）、和解へと向かうべきとの強い決意が見て取れる。なお、上述の「テシュヴァ」という言葉を用いた教皇庁文書『私たちは忘れない—ショアーに関する反省』が発表された記者会見で、あるジャーナリストが「教会は謝罪しているのか」と質問した際、文書の作成を担当したアメリカのキャシディ枢機卿は「これは悔い改めの行為です。それは謝罪以上のものです」と回答したという²¹。このことは、この文書が、単なる謝罪を超えた、キリスト教徒の内面的、思想的な根本的変革を促す意図をもって「テシュヴァ」という言葉を用いていることを示している。

このような背景のもとで、サイナーは上述のように「テシュヴァは、忘却を意味するのではなく、過去に行ったような行為を二度と繰り返さないための、記憶の儀式化である」と語っている。カトリック教会が試みている「テシュヴァ」のいわば「本気度」を、サイナーは正当に評価しようとしているのである。

(3) 応答へのジレンマ

さて、②の強調点の文末には「ユダヤ教の諸団体は、この新しい関係を支持する聖職者の多くに敬意を払ってはいるが、そうした声明の神学的重要性を認めるような類のユダヤ教の返答は何も存在しない」とあるが、この発言は、現代のユダヤ教を代表する主要な機関への批判が記された③の強調点の伏線と考えられる。サイナーは、北アメリカの主要なユダヤ教団体について、次のように記している。

北アメリカのユダヤ人集団は、とてもよく組

¹⁷ 東門陽二郎訳『受肉の秘儀 2000年の大聖年公布の大勅書』（カトリック中央協議会、2000年）。

¹⁸ 教皇庁国際神学委員会／東門陽二郎訳『記憶と和解 教会の過去の種々の過失』（カトリック中央協議会、2002年）

¹⁹ 同上、67-69頁。

²⁰ 同上、69頁。

²¹ *New York Times*, Mar. 17, 1998.

織されている。ラビの協会やすべての主要な教派からなるシナゴグの協会が存在する。このような宗教的な諸組織に加えて、ユダヤ教共同体は、公正な裁判や地方自治体の立法府においてユダヤ人の諸権利を擁護するための法律を促進するために、多くの仲介を行っている。このタイプのうち二つの組織はよく知られている。すなわち、アメリカユダヤ人協会（American Jewish Committee）と名誉棄損防止同盟（Anti-Defamation league）である。キリスト教共同体における諸活動に関する声明のほとんどは、これらの団体から発せられる。なぜならこれらの組織は、大規模な諸団体の代表となっており、人々はこれらの組織がユダヤ人という名義で声明を発するに相応しいと理解しているからである²²。

さらにサイナーは、ユダヤ教徒が歴史上どのような形態で公的な声明を発表してきたかを検証した上で、現代のユダヤ教の代表的機関による声明の公表方法を「第三の文書様式」と呼び、次のように指摘している。

キリスト教に対するユダヤ教の態度を表明するための第三の文書様式は、ある組織の全国議会を通過した「決議」である。ユダヤ教共同体における多くの団体は、それぞれの年一回の会合でそうした決議を通過させる。決議のための通常の枠組みは、決議に関する「事実」を指し示す導入としてのいくつかの段落と、そのグループのメンバーによる何らかの肯定的もしくは否定的な行動を推奨することを含めた段落から成っている。こうした決議文書は、しばしば、真剣な論争と公の議論の対象となる。決議が通過した後、その組織はその文書を構成メンバー全員に公にし、時には新聞やテレビの記者たちがその公表の範囲を拡大する記者会見を開催する。アメリカヘ

ブライ集会連合（Union of American Hebrew Congregations）、アメリカ・ラビ中央協議会（Central Conference of American Rabbis）、アメリカユダヤ人協会（American Jewish Committee）、名誉棄損防止同盟（Anti-Defamation League）のような、宗教的かつ地域密着型の団体は、様々な教会団体を顕彰する決議を通過させている²³。

ここでは一例として、ユダヤ教の代表的な機関のひとつとされる「名誉棄損防止同盟」が、教皇庁文書『私たちは忘れない—ショアーに関する反省』公布後に発表した実際の声明を見てみよう。同文書公布当時の「名誉棄損防止同盟」の宗教交流分野の指導者だったラビのレオン・クレニッキは、その声明において、ヨハネ・パウロ二世のそれまでの取り組みや各国の司教団声明を高く評価しつつ、文書全体を詳しく検証して細かい批判を加え、「この文書は11年間待ったユダヤ人共同体にとって、期待外れである」と結論づけている。批判点のひとつに、次のような指摘がある。

このようにこの文書は、ユダヤ教とユダヤ民族に対する過去と現在の否定的な立場について問題を提起しているが、どれほどたくさんの侮蔑の教えが、何世紀もの間、キリスト教に影響を及ぼしたか、そしてどれほどそれが深くナチスの迫害へのキリスト教徒の応答に影響を与えたかを示す宗教的、倫理的義務をもっている。『私たちは忘れない』は、神学的軽蔑の本質をカトリック信者が理解するのを助けるものであったなら、より効果的であったろう。というのも、ユダヤ人は今なお、戦前の説き勧めや教えのなかに置かれているからである。軽蔑の教え、すなわち神学的な反ユダヤ主義は、一般的には、反セム主義と分離されない。ナチスのプロパガンダは、歴

²² Some Reflections on Dabru Emet, p. 1.

²³ Ibid., p. 8.

史的に、その人種的イデオロギーを促進するためにカトリック神学者の神学的反ユダヤ主義と宗教的技法を用いていた。反ユダヤ主義は、ヨーロッパ文化、芸術、多数のカテドラルのガラス装飾、そして西洋文学の中にあらわれ、「新しい異教」であるナチスの反セム主義を容易ならしめた。哀しいことに、この文化的、神学的権威は、いまだに西洋の集合的無意識という現実にある²⁴。

この文脈におけるレオン・クレニッキの批判は、『私たちは忘れない—ショアーに関する反省』の中で示された「反ユダヤ主義」(Anti-Judaism)と「反セム主義」(Anti-Semitism)に関する分析に向けられている。すなわち、同文書では、「反ユダヤ主義」は誤った聖書解釈によって生じたキリスト教徒の偏見に基づくユダヤ人迫害の要因であり、一方「反セム主義」はナチスの国家社会主義のイデオロギーに基づくユダヤ人迫害の要因であると分類し、前者についてはキリスト教徒の罪を認めるが、後者についてはキリスト教に根をもないものと捉えている。ただし、前者が後者の拡大を容易にしたことは認めている²⁵。

つまりレオン・クレニッキの批判は、このような理念的な区別は現実の姿ではなく、「反セム主義」もまた、キリスト教の絶対的な影響力のもとで起こったことをより積極的に認めるべきだという趣旨である。

ところで、この「反ユダヤ主義」と「反セム主義」に関する分析は、「ダブル・エメト」でもひとつの項目として取り上げられている。そこには「ナチズムそれ自体は、キリスト教の不可避の結果ではなかった」と記され、レオン・クレニッキの批判とは逆に、教皇庁文書『私た

ちは忘れない—ショアーに関する反省』の分析を支持する内容となっている。つまり「ダブル・エメト」の起草者たちは、レオン・クレニッキの批判について、③の強調点にあるように、「重要な変革のニュアンスや知識を明確に欠いている」と捉えていることが推測されるのである。

キリスト教側からユダヤ教に対する何らかの文書の交付や関係改善に向けた行動が起こる際、ユダヤ教の代表的機関は、これまでもろ手をあげた歓迎を示さずに、常に何らかの批判の目を向けてきた。その結果、不協和音が残存していく。しかし、サイナーや彼と同じ立場に立つユダヤ人学者は、上述のカトリック教会による一連の文書や実践が、そのようなユダヤ教からの諸批判に対する応答の上に成り立っていることを、自身らの研究から十分に理解していたと考えられる²⁶。その一方で、「重要な変革のニュアンスや知識を明確に欠いている」ユダヤ教の代表的機関が、批判を繰り返す場面を、彼らはしばしば看取した。それがために、キリスト教がユダヤ教に対する旧態依然とした姿勢を崩していないという「月並みな考え方」が一般のユダヤ人の間に相変わらず残り、結果的に「ユダヤ教共同体内部に困惑をもたらした」と指摘しているのである。

ユダヤ教の代表的機関の応答をめぐるこの問題は、宗教間対話に長年従事してきたサイナー自身の個人的ジレンマでもあった、と考えることができる。彼は次のように述べている。

私たちのグループの幾人かのメンバーは、ユダヤ教のキリスト教およびキリスト教徒との関係を再評価するべき時が到来したことを悟った。とりわけ、私にとっては、ベルリン

²⁴ Leon Klenicki, "Commentary by Leon Klenicki," in *The Holocaust, Never to be forgotten: Reflections on the Holy See's Document We Remember*, A stimulus Book, New York, Paulist Press, 2001, p. 42.

²⁵ *We Remember: A Reflection on the SHOAH*, IV.

²⁶ カトリック教会の諸文書とユダヤ教からの批判との呼応関係については、前掲の拙著『*Nostra Aetate* 公布50年を経たカトリックとユダヤ教の対話—1998年教皇庁文書「私たちは忘れない」の反響を中心に—」を参照されたい。

のペテル・フォン・デ・オステン・ザッケン教授によって取りあげられた忘れられない問いがある。「私たちキリスト教徒は、あなた方にとって何者ですか?」。この問いは、最近のある会議で彼が提起したもので、返答を要求していた。この言葉は、私の脳裏を去らなかった²⁷。

戦後、キリスト教側からユダヤ教に向けて行なわれてきた関係改善のための諸々の取り組みに対して、ユダヤ教の代表的機関からの応答が不発に終わることが繰り返される中で、宗教間対話の最前線の現場に携わってきたサイナーに向けられた「私たちキリスト教徒は、あなた方にとって何者ですか?」というキリスト教徒からの問いは、彼にとって重い課題となったことがわかる。おそらくサイナーにとって、この問いに対して個人的な思いを回答することは容易だったかもしれない。しかしサイナーは、キリスト教の変革が顕著となった現代において、「ユダヤ教徒にとってキリスト教徒は何者か」という問いが、個人的対応を超えて、現代のユダヤ教徒が真剣に向き合うべき根源的な課題であると受け止めたのではないだろうか。サイナーが抱えていた個人的ジレンマは、「ダブル・エメト」起草の動機として重要な点だと思われる。

4. 文書の起草と公表

これまで見てきたように、「キリスト教を研究するユダヤ人学者の会」によって「ダブル・エメト」が生み出されるまでには、会の中に二つの意見の異なる立場の学者が存在し、少数派であったサイナーを含む第二の立場の学者たちが、上記①～③の視点を強調することで会の中で議論を深めていった経緯があった。次に、「ダブル・エメト」の執筆の主体となったのがどのような人物で、誰に向かってどのような

目的で書かれたのか、また発表にあたりどのような工夫が加えられたのかを、サイナーの論考をもとに探してみたい。

まず文書の起草者は、多様な立場にあるユダヤ教徒であった。執筆の主体となった人物は四人で、後に一人が取りまとめに加わった。サイナーの説明によると次のようなメンバーである。

声明の執筆者は二人のラビ、男性の神学者と女性の聖書学者・神学者であった。私たちは、アメリカのユダヤ教のいかなる単一の宗派も代表していない。ティクヴァ・フライマールンシー教授はアメリカの保守派ユダヤ教に加入しており、シカゴ大学の神学校で教えている。ピーター・オックス教授は、バージニア大学の宗教学部でユダヤ教哲学の教授である。ラビのデイヴィッド・ノヴァク博士は、伝統的ユダヤ教連合の指導者の一人で、トロント大学のユダヤ教研究の教授である。私が加入しているのは改革派ユダヤ教であり、カトリック大学の神学部でユダヤ教を教えている。したがって、我々の間に教派の一致は存在しない。…中略…私たちは、委員会にもう一人の人物、ラビのデイヴィッド・サンドメルを加えた。彼は、ペンシルベニア大学で博士号を得た人物である。彼は、私たちの秘書として、またファシリテーターとして仕えた。彼はしばしば、私たち四人が一人になって黙想できるように部屋の外へ連れ出し、多くの論争を終結させた²⁸。

ここで気になるのは保守派と改革派の名が挙がる中で、正統派ユダヤ教に属するメンバーが存在しないことである。「ダブル・エメト」発表に際しての署名した人々のうち、正統派ユダヤ教に属する者の割合がわずか5%に過ぎなかったことや、発表後の文書への批判の主体の

²⁷ *Some Reflections on Dabru Emet*, p. 6.

²⁸ *Ibid*, p. 9.

多くが正統派ユダヤ教に属する人々であったことを考えると²⁹、文書の起草は、当初からユダヤ教の中のラディカルなメンバーによる企画であったとも言える。とはいえ、上記のように、起草者の立場や教派も一枚岩ではない。メンバーは「長時間にわたる論争」に時間を割き、慎重な議論の末にいくつかの点で「妥協」もあったという³⁰。また、この会の初期の段階では、正統派のユダヤ人哲学者マイケル・ウイスコグロットが「ユダヤ教学者団体がキリスト教へのアプローチの思慮深く真剣な再評価へと前進を強く促した」と語っている³¹。作成に至るこのような経緯から、「ダブル・エメト」の起草が、ラディカルなメンバーの単なる独走とはいわなく、その内容にはユダヤ教の多様な立場の人々の議論が反映されていることは間違いない。

次にこの文書が想定していた読者は誰であるか。この問題は、その発表形態のユニークさと深く関係している。既述の通り、「ダブル・エメト」は二つの大手新聞(*The New York Times*, *Baltimore Sun*)とインターネット上で発表された。このような発表媒介の権威、さらに

執筆者の権威を問う批判もあったが、むしろそのような批判が挙がることは、サイナーたちにとって織り込み済みだったと言えるようである。というのも、その発表の形態は、広く議論を呼び起こすために、まさに格好の手法だったからである。なお、「ダブル・エメト」の発表に際して、周到な準備の末に、多くのラビやユダヤ人学者の署名が添付された。この手法について、サイナーは次のように記している。

文書のための仕事をして二年後、私たちは非常に大胆な段階へ踏みこんだ。私たちは、文書の草案を 300 人以上のラビ、学者、神学者たちに送付した。要望は単純であった。私たちは、彼らに文書を読んで、一字一句変えることなく、それに署名するようお願いしたのである。立派なラビや神学者たちに、彼らの考え方を聞くことなく、文書に署名をお願いすることは、最高度の「厚かましさ(chutzpah)」である。しかしそれは、その声明を発行し本を完了させるために、より手取り早い務めであった。驚いたことに、彼らの 200 名以上がその声明に署名することに同意してくれた。署名をした人たちの中には、アメリカのユダヤ教の最も重要な指導者たちがいたし、正統派、保守派、改革派、そして再建派のユダヤ人が含まれていた。短期間のうちに、ヨーロッパとイスラエルのユダヤ人の大きな団体もまた、インターネットを通じて、その文書に署名してくれた。今日、「ダブル・エメト」には約 300 名の署名者がいる。彼らの中には、この文書のなかの一つの点もしくはそれ以上の点に深刻な反対意見を持っている人もいる。しかし、彼らは自分の反対意見にもかかわらず署名した。なぜなら、彼らは、文書全体がとても重要であると考えているからである³²。

²⁹ ユダヤ教と非ユダヤ教との関係に関する研究材料を提供しているイギリスのデータサイト JEWISH/NON-JEWISH RELATIONSBETWEEN EXCLUSION AND EMBRACE. AN ONLINE TEACHING RESOURCE (<https://jnir.div.ed.ac.uk/about/>) に「ダブル・エメト」発表後の反響と議論が整理されている。

³⁰ *Some Reflections on Dabru Emet*, p. 9.

³¹ *Ibid.*, pp.6-7. マイケル・ウイスコグロット (Michael Wyschogrod, 1928-2015) はドイツ生まれの西洋哲学研究者で正統派に属するユダヤ人哲学者だった。ベルリンでクリス・ナハト (水晶の夜) を経験し、1939 年にアメリカに亡命し、コロンビア大学でキルケゴールとハイデガーに関する研究で博士号を取得し、いくつかの大学に所属後、ヒューストン大学に長く勤めた。著書に *The Body of Faith: God in the People Israel* (2000), *Abraham's Promise: Judaism and Jewish-Christian Relations* (2004) などがある。ウイスコグロットは、「ダブル・エメト」の起草に理解を示していたが、最終的には文書への署名は行なわなかった。

³² *Some Reflections on Dabru Emet*, p.10. なお文中の英語 chutzpah は、もともとヘブライ語に由来する「厚かましさ」を意味する言葉であるが、上

署名者の中には「ダブルー・エメト」の内容の中に賛同できない点が含まれていても、議論の重要性を認めて署名した者もいたという。つまり、この発表形態は、賛成にしても反対にしても、広くユダヤ教徒の間で議論が展開される効果を狙ったものである。その背景には、上記の強調点③に記されているように、現代におけるキリスト教の変革に対する無知や無関心に注意を喚起したいという目論みがあった。

以上のことからわかるように、「ダブルー・エメト」が想定している読者は、第一義的にはユダヤ教徒である。サイナーは次のように記している。

ダブルー・エメトは決定打となるような文書ではない。これは、第一にユダヤ人自身の間での議論の契機になるものである。私たちはその上で、ユダヤ人とキリスト教徒の間で、懸命で深く真剣な議論のための話題を提供することを希望している。この文書自体が、私たちの目的を表わしている。つまり、「私たちはただ、私たち自身—ユダヤ人学者たちの超教派的団体—の中で議論してきた。しかし私たちは、ユダヤ教に敬意を示すためにキリスト教徒が行なっている努力について、ユダヤ人が学ぶ時が来たこと、そして、ユダヤ教がキリスト教について何を言うことができるかを、ユダヤ人が熟考する時が来たと信じている」ということである。言い換えれば、私たちは、ユダヤ教共同体の内部に、論争や真剣な議論を勧めているのである。ダブルー・エメトは、こうした議論のための枠組みを提供している³³。

サイナーが言う「ユダヤ人学者たちの超教派的団体」とは、言うまでもなく「キリスト教を研究するユダヤ人学者の会」のことである。この

メンバーは、宗教間対話の現場でキリスト教の変革の動向に敏感に触れてきたが、そのような変革は決してユダヤ教全体の共有事項とはなっていなかった。「ダブルー・エメト」は、ややスキャンダルな発表の手法を用いることで、ユダヤ教内での広い議論を狙ったものがある。「ダブルー・エメト」自体は非常にコンパクトな文書であるが、議論の広がりを見込んで、執筆者たちは発表と同時に、同じ声明を掲載した400頁を超える書籍『ユダヤ教にとってのキリスト教 (*Christianity in Jewish Terms*)』を編集して発行した³⁴。その後の反響や批判の大きさを見れば、サイナーたちの当面の目的はひとまず達成されたといえることができるだろう。

結 語

20世紀後半から宗教的多元主義などの宗教間対話の方法論や理論的研究は比較的盛んであったが、実際の対話の現場に携わる人々の動向は、思いのほか光が当たっていないように思われる。本稿でその論考を検証したマイケル・A・サイナーについても、管見の限り日本では紹介されていようである。本稿では、ユニークなユダヤ教文書「ダブルー・エメト」について、マイケル・A・サイナーの論考 *Some Reflections on Dabru Emet* の前半の記述を中心に、起草の経緯や背景を探ってきた。ユダヤ教とキリスト教の対話に関しては、キリスト教側からのアクションに対するユダヤ教の代表的機関の応答は、これまで比較的消極的かつ警戒的な色彩が強かったと言える。そのような中で「ユダヤ人学者たちの超教派的団体」が作成した文書は、宗教間対話の現場からのいわば「草の根的な対話の試み」として注目に値する。なお、サイナー

記の文脈では「大胆な試み」といった善い意味で用いられている。

³³ *Some Reflections on Dabru Emet*, p. 10.

³⁴ Tikva Frymer-kensky, David Novak, Peter Ochs, David Sandmel, Michael Singer, *Christianity In Jewish Terms (Radical Traditions)*, Westview Press, 2000. このタイトルが、前述したサイナーの個人的ジレンマ、「ユダヤ教徒にとってキリスト教徒は何者か」という問いに呼応するものであることに注意を喚起したい。

の論考の後半には、「ダブルー・エメト」の内容の構造と諸々の反響に対する回答が記されているが、本稿では紙幅の都合上扱うことができなかった。それについては本稿の続編となる別稿であらためて扱うことにして、最後に「ダブルー・エメト」を私訳によって紹介する³⁵。

* * *

ダブルー・エメト（真実を話す）：キリスト教徒とキリスト教に関するユダヤ教の声明

近年、ユダヤ教とキリスト教の関係において、劇的で前例のない変化が見られる。ユダヤ教徒が国外追放されてからのほぼ2000年を通して、キリスト教徒はユダヤ教をできそこないの宗教、もしくはせいぜいキリスト教への準備段階にある宗教、キリスト教において完成される宗教と見なす傾向があった。しかし、ホロコースト以降の何十年かの間に、キリスト教は劇的に変化した。ローマ・カトリックとプロテスタントの双方において、ユダヤ人とユダヤ教へのキリスト教徒の虐待について自分たちの良心の呵責を公に宣言する公式のキリスト教団体が増加している。その上、それらの声明は、神がユダヤの民との契約を今も保持し続けていることを認めるため、また世界市民とキリスト教信仰自身に対するユダヤ教の貢献を称えるために、キリスト教の教えと説教が、改革されうるし、しなければならないと表明している。

私たちは、これらの挑戦が、心あるユダヤ教からの応答に値すると信じている。私たち超教派からなるユダヤ人学者の会は、キリスト教徒がユダヤ教に榮譽を与えるための努力につい

て、ユダヤ人が学ぶ時が来ていると考えている。最初の段階として、私たちは、どのようにしてユダヤ人とキリスト教徒がお互いに関係し得るかについて、八つの簡潔な声明を提示する。

1. ユダヤ人とキリスト教徒は、同じ神を崇拝している

キリスト教が起こる前、ユダヤ人はイスラエルの神の唯一の崇拝者であった。しかし、キリスト教徒もまた天と地の創造者であるアブラハム、イサク、ヤコブの神を崇拝している。キリスト教徒の崇拝がユダヤ人にとって実行可能な宗教的選択ではないとはいえ、私たちは、ユダヤ教神学者として、キリスト教を通して、何億人もの人々がイスラエルの神との関係に入っていることを喜んでいる。

2. ユダヤ人とキリスト教徒は、同じ書物—聖書—に権威を求めている（ユダヤ人は「タナハ」と呼び、キリスト教徒は「旧約聖書」と呼んでいる）

宗教的な方向づけ、霊的な豊かさ、共同の教育などに目を向ければ、私たちはそれぞれ、似たような教えをもっている。すなわち、神が世界を創造し養っていること、神がイスラエルの民との契約を打ち立てたこと、神が現した言葉が、イスラエルを正義の人生へと導いていること、そして神が究極的にイスラエルと全世界を贖うこと、などである。しかし、ユダヤ人とキリスト教徒は、聖書を多くの点で異なる仕方て解釈している。こうした相違は、つねに尊重されなければならない。

3. キリスト教徒は、イスラエル国でのユダヤ民族の権利を尊重することができる

ホロコースト以来、ユダヤ人にとって最も重要な出来事は、約束された地でのユダヤ教国家の再建であった。聖書に基礎をおく宗教の構成員として、キリスト教徒は、イスラエルが、ユダヤ人と神との間の契約の物理的中心として、

³⁵ 原文は本稿注6で触れた The Institute for Islamic, Christian, and Jewish Studies (ICJC) のウェブサイトからダウンロードできるメディアに掲載された文書のPDF版を用いた (<https://icjs.org/sites/default/files/Dabru%20Emet%20-%20PDF%20copy.pdf>)。ただし、わかりやすさのために各項目に1～8の番号をふった。また〔 〕内は訳者による補足である。

ユダヤ人に約束され—そして、与えられた—ことを認識している。多くのキリスト教徒は、政治的な理由よりもずっと深遠な理由のために、イスラエル国を支持している。ユダヤ人として、私たちは、このような支持を称賛する。私たちはまた、ユダヤ教の伝統が、ユダヤ教国家に住んでいる非ユダヤ人に対して公正を期していることを認めている。

4. ユダヤ人とキリスト教徒は、トーラーの倫理的原理を受け取っている

トーラーの倫理的諸原理にとって中核的なことは、あらゆる人間の奪うことのできない神聖さと尊厳である。私たちのすべては、神の像として創造された。この共有の倫理的重要性は、私たち二つの共同体の間の、関係改善の基盤になりうる。それはまた、私たちの仲間の人生をよりよいものにし、私たちを損ない墮落させる不道徳や偶像崇拜に立ち向かうための、全人類に向けた力強い証言の基盤になりうる。このような証言は、過去の世紀の前代未聞の恐怖のあと、特に必要とされている。

5. ナチズムは、キリスト教徒の現象ではなかった

キリスト教徒の反ユダヤ主義とキリスト教徒のユダヤ人への暴力の長い歴史なしに、ナチのイデオロギーは確立しえなかったし、また実行されえなかった。非常に多くのキリスト教徒が、ナチの暴虐に関わり、もしくは賛成していた。他のキリスト教徒は、そのような暴虐に十分な抵抗を行なわなかった。しかしながら、ナチズムそれ自体は、キリスト教の不可避の結果ではなかった。ナチのユダヤ人殲滅が、もし十分に成功していたとすれば、それは、その殺意の猛威を、より直接的に、キリスト教徒に向けたことであろう。私たちは、ナチ政権下でユダヤ人を救うために、自分たちの命を危険にさらし、もしくは犠牲にしたキリスト教徒たちのことを、感謝をこめて、正当に評価している。その

ことを考慮して、私たちは、ユダヤ教とユダヤ民族の蔑視を明解に否認するキリスト教神学における最近の成果が継続することを、奨励する。私たちは、蔑視の教えを否定するこうしたキリスト教徒らを称賛する。そして私たちは、彼らの先祖たちが犯した罪のために、彼らを批判することはしない。

6. ユダヤ人とキリスト教徒の間に人間的に和解できない相違は、聖書で約束されているように神が全世界を救うまで、解決されないであろう

キリスト教徒は、イエス・キリストとキリスト教の伝統を通して、神を知り、神に仕えている。ユダヤ人は、トーラーとユダヤ教の伝統を通して、神を知り、神に仕えている。この相違は、一方の共同体が他方の共同体よりも、よりの確に聖書を解釈していると言い張ることでは、あるいは、他方の上に政治的な力を用いることによって、解決されないであろう。まさに、キリスト教徒が私たちの啓示への信仰を尊重することを、私たちが期待しているように、ユダヤ人はキリスト教徒の啓示への信仰を尊重することが出来る。ユダヤ人もキリスト教徒も、相手の共同体の教えに賛同することを押し付けられるべきではない。

7. ユダヤ人とキリスト教徒の新しい関係は、ユダヤ教の実践を弱めないであろう

改善した関係が、文化的、宗教的な同化を促進することはないだろう。そのことをユダヤ人は正しく懸念している。それ[改善した関係]が、伝統的なユダヤ教の礼拝の諸形態を変えたり、ユダヤ人と非ユダヤ人間の結婚を増やしたり、より多くのユダヤ人がキリスト教に改宗するように説得したり、あるいはユダヤ教とキリスト教の偽りの融合を創りだしたりすることはない。私たちはキリスト教を、ユダヤ教の内側に起源をもち、今なおユダヤ教との意義深いつながりをもつ信仰として、尊重している。私たち

はキリスト教を、ユダヤ教の延長上にあるものとして見ていない。私たちは、私たち自身の伝統を大事にするかぎりにおいて、この関係を誠実に追及することが出来る。

8. ユダヤ人とキリスト教徒は、正義と平和のために、ともに働く必要がある

ユダヤ人とキリスト教徒は、お互いに自分たちの流儀で、迫害、貧困、そして人間の墮落や悲惨などの存続に反映された世界の報われない状態を認識している。正義と平和は最終的には神のものであるが、私たちが他の信仰共同体の人々とともに連帯して努力することは、私たちが待ち望んでいる神の国の到来に役立つであろう。別々に、また一緒に、私たちの世界に正義と平和をもたらすために、私たちは働かなければならない。この事業において、私たちはイスラエルの預言者たちの預言に導かれている。

終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞってそこに向かい、…多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。(イザヤ書2章2-3節)

ティクヴァ・フライマーケンシー シカゴ大学

デイヴィッド・ノヴァク トロント大学
ピーター・オックス バージニア大学
マイケル・サイナー ノートルダム大学

このプロジェクト運営のために教育的な場を提供してくれた「キリスト教・ユダヤ教研究所」に感謝申し上げる。

* * *

参 考 文 献

- ・カルロ・M・マルティーニ「ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼—和解」『神学ダイジェスト』90号(上智大学神学会, 2001年)
- ・木鎌耕一郎「*Nostra Aetate* 公布50年を経たカトリックとユダヤ教の対話—1998年教皇庁文書「私たちは忘れない」の反響を中心に」『日本カトリック神学会誌』第27号(197-225頁) 2016年
- ・教皇庁国際神学委員会／東門陽二郎訳『記憶と和解 教会の過去の種々の過失』(カトリック中央協議会, 2002年)
- ・第2パチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳『第二パチカン公会議公文書 改訂公式訳』(カトリック中央協議会, 2013年)
- ・東門陽二郎訳『受肉の秘義 2000年の大聖年公布の大勅書』(カトリック中央協議会, 2000年)
- ・日本カトリック宣教研究所監修／カトリック新聞編集部訳『教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡 紀元2000年の到来』(カトリック中央協議会, 1995年)
- ・和田幹夫訳「わたしたちは記憶にとどめます—ショアーを反省して」『人間文化』第3巻(英知大学人文科学研究室, 2000年)
- ・ヨハネス・ボイトラー／鈴木伸国訳「キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書—教皇庁聖書委員会発表の新文書—」『神学ダイジェスト』95号(上智大学神学会, 2003年)
- ・Avery Cardinal Dulles, “*SHOULD THE CHURCH REPENT?*”, First Things., (<http://www.firstthings.com/article/1998/12/should-the-church-repent>)
- ・Christian Scholars Group on Christian-Jewish Relations, “*A Sacred Obligation: Rethinking Christian Faith in Relationship to Judaism and the Jewish People.*”, Sep. 1, 2002, (<http://www.ccjr.us/dialogika-resources/documents-and-statements/ecumenical-christian/568-csg-02sep1>)
- ・Commission of the Holy See for Religious Relations with the Jews, “*We Remember: A Reflection on the SHOAH*”, Mar18, 1998.
- ・José M.Sánchez, *Pius XII and the Holocaust:*

- Understanding the Controversy*, The Catholic University of America Press, 2002.
- ・ Leon Klenicki, “*Commentary by Leon Klenicki*,” in *The Holocaust, Never to be forgotten : Reflections on the Holy See’s Document We Remember*, A stimulus Book, New York, Paulist Press, 2001.
 - ・ Michael A. Signer, “*Some Reflections on Dabru Emet*”, 26 July 2001. (<http://www.jcrelations.net/Some+Reflections+on+Dabru+Emet.2222.0.html?L=3>)
 - ・ Michael A. Signer, “*On Christian Teshuvah : The Open Heart of the Jewish People*”, fall, 2000. (https://www.bc.edu/content/dam/files/research_sites/cjl/texts/cjrelations/resources/articles/signer.htm)
 - ・ Michael O. Garvey, “*Theologian Rabbi Michael Signer dies*”, Jan 11, 2009. (<https://news.nd.edu/news/theologian-rabbi-michael-signer-dies/>)
 - ・ National Jewish Scholars Project, *Dabru Emet : A Jewish Statement on Christians and Christianity*, Institute for Christian & Jewish Studies, Baltimore, Maryland. Sep. 10, 2000. (<http://www.ccjr.us/dialogika-resources/documents-and-statements/jewish/319-dabru-emet>)
 - ・ *New York Times*, Mar. 17, 1998.
 - ・ Richard McBrien, “*Remembering Rabbi Michael Signer*”, Feb 9, 2009. (<https://www.ncronline.org/blogs/essays-theology/remembering-rabbi-michael-signer>)
 - ・ Tikva Frymer-kensky, David Novak, Peter Ochs, David Sandmel, Michael Singer, *Christianity In Jewish Terms (Radical Traditions)*, Westview Press, 2000.